



奥の細道



川崎ゆき

「奥が深いというのは、よく分からないということでもあります」

「奥が深いというのがよく分からないという意味ですか」

「そうではなく、奥がありそうだが、その奥がよく分からない」

「奥に何があるかが分からないわけですね」

「実際にあるものなら、分かります」

「奥に細い道があるとか」

「そうです。奥に道がある。これは分かる。それに道幅も分かっているでしょ。奥の細道は分かっている世界です。まあ、その沿道がどうなっているのかははっきりとは分かりませんが、謎ではありません。それにその道、いずれは果てるでしょ」

「実際にある道ですからねえ」

「ところが想像の世界は別です。色々と想像できそうな世界です。そのため、よく分からない」

「具体的な話じゃないのですね」

「夢の世界がそうです」

「それは最初からないでしょ」

「しかし、多くの夢は現実と繋がっていたりします。実在の人物が出て来たりするでしょ。それに場所も」

「そうですねえ」

「しかし、現実とは全く違うことが起こってたりします」

「それが奥が深いと」

「奥を感じさせます。意味が分かりにくいので」

「はい」

「しかし、よく分からない。だから、奥行きがあるように見えてしまう」

「夢なので、フィクションのようなものでしょ」

「幻想のようなものですが、現実にあるものよりも、そういった存在しないものの方が含みが多いのです」

「洞窟などはどうです。非常に深い洞窟」

「何処まで続いているのか分からないような長い洞窟なら、奥が深いでしょう。その先がよく分からないからです。洞窟の深さと、分からないということが重なります」

「でも、洞窟の奥まで行けば、もう大丈夫でしょ」

「洞窟の奥の突き当たりは、確かに奥ですが、分かってしまった奥です。そのため、奥深さはもうありません」

「店屋の奥も気になります」

「施設内で、一般の人が入れない場所ですね」

「そうです。ドアがあり、そこは入れません。関係者は出入りできますが、中がどうなっているのか、見たいと思います」

「それもよく分からないからでしょうねえ」

「はい」

「隠しているわけじゃないのですが、見えないので、隠れている。しかし、具体的なものなので、奥が深いということではないでしょう」

「やはり、意味の問題ですか」

「意味があるのかどうかさえ分からない」

「では、奥行きを感じるというのは、よく分からないという意味ですか」

「何かありそうなね」

「じゃ、隠すことで意味ができたりしますねえ」

「隠すようなことでもないのに、隠し立てするとね」

「それは、使えそうです」

「ほう」

「まだ、奥があるぞと、威嚇できます」

「実は何もなかったもね」

「何もないのに、隠す。これです。これは安上がりでいい」

「まあ、それはすぐに見抜かれるでしょう。非常に上手に、隠していることを隠しているように振る舞わなければ」

「それじゃ、相手が気付かない」

「気付くように隠すと、単なるハッタリになる」

「はい」

「しかし、そんなことをしなくても、何も隠していないし、奥も裏もないのに、そう思われてしまう人がいますよ」

「それは何でしょう」

「奥ゆかしい人でしょうねえ」

「ゆかしい？」

「奥行きのある人です」

「どうすれば、そういう人に見られます？」

「全部話さないことですよ。二つか三つ手前で留め置くだけで、少しは奥が出ます」

「やってみますが、我慢できそうにありません」

了